

自然学の基礎としての表象力，評定力

——アルベルトゥス・マグヌスのアヴィセンナとの比較——

小林 剛

1 序

13世紀西欧において議論される表象力（phantasia）の主たる源泉はアリストテレスである。しかし、しばしばこの表象力と関連付けて議論される評定力（aestimativa, aestimatio）については、その萌芽的な内容はアリストテレスにおける表象力にも若干見受けられはするものの¹⁾、その主たる源泉はむしろ、アリストテレス以降に出現したアリストテレス主義者たち（アルベルトゥスの言い方に従えばペリパトス派）であると言うべきだろう。そしてその中でもアヴィセンナは、評定力について詳細に語り、13世紀西欧に大きな影響を与えた思想家として有名である。一方、西欧を代表するアリストテレス主義者であるアルベルトゥス・マグヌスは、アヴィセンナにおける評定力を非常によく理解し、なおかつこれを自らの思想の中で盛んに活用した。本稿では、そのようなアルベルトゥスにおける表象力、評定力が、その源であるアヴィセンナにおける評定力から何を受

〈略号〉

De anima: Albertus Magnus, *De anima, Alberti Magni Opera Omnia*, Editio Coloniensis, t. 7, pars 2, Münster, Aschendorff, 1968.

De homine: Albertus Magnus, *De homine, Alberti Magni Opera Omnia*, Editio Coloniensis, t. 27, pars 2, Münster, Aschendorff, 2008. 但し q. (quaestio: 「問題」) と a. (articulus: 「項」) の箇所番号は Albertus Magnus, *Summa de creaturis*, secunda pars, B. *Alberti Magni Opera Omnia*, Editio Borgnet, vol. 35, Paris, Vivès, 1896, tractatus 1 のものを用いる。

Phys.: Albertus Magnus, *Physica, Alberti Magni Opera Omnia*, Editio Coloniensis, t. 4, pars 1, Münster, Aschendorff, 1987.

1) Aristoteles, *De anima*, III, c. 3, 429a4-8; c. 7, 431a14-17; c. 10, 433b27-30; 434a4-12. Cf. Dag Nikolaus Hasse, *Avicenna's De anima in the Latin West*, London/Turin, The Warburg Institute/Nino Aragno Editore, 2000, p. 141.

け継ぎ、それをどう発展させたかを見極めることにしたい。

2 アルベルトゥスにおける表象力、評定力の起源

アルベルトゥスはまず『人間論』の中で表象力を定義するが、その際、表象力の意味を最広義、広義、狭義の三つに区別する。最広義の表象力とは、「現実態に在る感覚活動によって引き起こされる運動」²⁾のことである。これはアルベルトゥス自身が「哲学者アリストテレスも『靈魂論』でこのようにして定義している」³⁾とされており、実際アリストテレスも『靈魂論』第3巻第3章で、「表象力とは現実態に在る感覚活動によって引き起こされる運動である」⁴⁾と語っている。アルベルトゥスがこの定義を行っている『人間論』第38問題第1項「表象力とは何であるか」の冒頭に掲げられている定義においても、「表象力とは、現実態に在る感覚によって引き起こされる運動であるとアリストテレスは『靈魂論』第3巻第3章で言っている」⁵⁾とある。だから、この最広義の表象力がアリストテレスに由来するものであることはまず間違いない。ただしこの定義は同項主文において「想像力と表象力と評定力とを含む」⁶⁾とされており、アルベルトゥスにおいては相当異なるものと考えられている諸能力を包摂する非常に漠然とした定義であり、この定義についてアルベルトゥスがこの後この著作の中で詳述することはない。

広義の表象力とは、同項主文においては、「複合分離によって諸々の像を比較する能力」⁷⁾であるとされる。ここでアルベルトゥスは、「アルガゼルもこのように定義している」⁸⁾と言い、同項冒頭には、上述のアリストテレスによる定義とともに、次のような定義が掲げられている。

引用 1

アルガゼルは次のように言って他の定義を与えている。すなわち表象力とは、或る時は諸々の形相の、また或る時は諸々の意味内容 (intentionio) の櫃 (arca) の中に在る諸々のものにおいて、複合分離しな

2) *De homine*, q. 38, a. 1, solutio, p. 289, l. 27.

3) *Ibid.*, ll. 26-27.

4) Aristoteles, *De anima*, III, c. 3, 429a1-2.

5) *De homine*, q. 38, a. 1, p. 288, ll. 6-7.

6) *Ibid.*, solutio, p. 289, ll. 24-26.

7) *Ibid.*, p. 289, ll. 28-29.

8) *Ibid.*, ll. 29-30.

がら働く力である⁹⁾。

この定義は明らかに、ガザリーの『哲学者の意図』の次の箇所を意識していると思われる。

引用 2

思惟力 (cogitatio) には、動かすことが属し、把捉することは属さない。というのも、思惟力は、或る時は諸々の形相の櫃 (archa) のうちに在るものについて、また或る時は諸々の意味内容 (intentio) の櫃のうちに在るものについて探究するのである。なぜなら、思惟力は、諸々の形相の櫃と諸々の意味内容の櫃との間にあり、これら二つのものにおいて複合分離だけをして働くからである¹⁰⁾。

この引用 2 のテキストの前後には、表象力 (phantasia. 原語は khayāl (imagination)) という言葉も出てくる。しかしこれはむしろ、諸々の像を保持する能力である想像力や記憶力の一部であり、具体的には、想像力や記憶力が保持した像を再現する力のことを表す¹¹⁾。アルベルトゥスはこの力ではなく、引用 2 にあるような、諸々の像を複合分離する能力である思惟力 (原語は al-mutakhayyilah (the imaginative power)) の方を表象力として採用しているのである。実際アルベルトゥスは『人間論』第 38 問第 1 項主文の中で、「だからアルガゼルも、或る人たちはこの能力を思考力 (cogitativa) と呼んでいると言っているのである。たとえばアヴィセンナはそう呼んでいるのである。だがしかし思考力は、固有な意味では人間のうちにしかない¹²⁾」と言っており、ガザリーも引用 2 のテキストの少し後で、「この能力は、人間においては思考力 (cogitativa) と呼ぶのが習わしとなっている¹³⁾」と語っているのである。このことから、アルベルトゥスが引用 2 のテキストを意識していたことは明らかだろう。なぜこのようにアルベルトゥスは、表象力の定義として、ガザリーにおける

9) *Ibid.*, p. 288, ll. 8-11.

10) Algazel, *Metaphysica*, ed. J. T. Muckle, Toronto, 1933, p.170, ll. 18-21. Cf. al-Gazali, *Maqās.id al-falāsifa*, ed. S. Dunya, Cairo, 1960, pp. 356-357.

11) Algazel, *Metaphysica*, p. 171, ll. 19-21. Cf. *Ibid.*, p. 169, ll. 22-24.

12) *De homine*, q. 38, a. 1, solutio.

13) Algazel, *Metaphysica*, p. 170, ll. 26-27.

表象力の定義ではなく、思惟力の定義の方を用いているのであろうか。これは恐らく、引用 1 で見た通り、異論、再異論よりも前に掲げられている定義にも用いられていることから考えると、これはアルベルトゥス独自の解釈ではなく、むしろ当時一般的に流布していた見方だったのであろう。そしてこのような見方が流布した理由は恐らく、ガザリーにおける思惟力の定義が、アリストテレス『靈魂論』第 3 卷第 3 章で述べられている表象力の主な内容に一番近かったからであろう。実際アリストテレスは同箇所、表象は「我々の思い通りになる」¹⁴⁾と言っているが、ガザリーも、思惟力が想像するものの例として、二つ首の人間や、半人半馬を挙げているのである¹⁵⁾。

ところがアルベルトゥスは、『人間論』第 38 問題第 1 項の冒頭に掲げられたガザリーの定義に対する第 1 異論解答と同問第 2 項主文において、早くもこのガザリーの見方から大きく逸脱する。すなわち前者でアルベルトゥスは、「表象力は想像力が把捉しないもの、すなわち、敵味方という意味内容や、真偽という意味内容を把捉する」¹⁶⁾と言う。また後者では、「表象力は像を有し、それらを複合分離して、真や偽という意味内容を引き出す (elicere)」¹⁷⁾と語るのである。引用 2 で見た通り、ガザリーにおける思惟力は何も把捉しない能力である。一方ガザリーにおいて意味内容を把捉するのは思惟力ではなく、もちろん表象力でもなく、評定力 (aestimativa. 原語では *wahm* (imagination)) であるとされる¹⁸⁾。しかしこの評定力は何らかの像を複合分離するような能力であるとは決して語られない。このことはアルベルトゥス自身も十分承知している¹⁹⁾。では、アルベルトゥスが述べたような、像の複合分離をしながら意味内容も把捉する能力、もっと正確に言えば、意味内容を引き出すために像の複合分離を行う能力としての表象力は、アルベルトゥスに全く独自のものなのであろうか。実は、ガザリーにおける思惟力や評定力のもととなっていると考えられているアヴィセンナにおける評定力は、意味内容を把捉する能力であると同時に、像を複合分離する能力でもある。

14) *De anima*, III, c. 3, 427b18.

15) Algazel, *Metaphysica*, p. 170, ll. 22-24.

16) *De homine*, q. 38, a. 1, ad11, p. 289, ll. 73-75.

17) *De homine*, q. 38, a. 2, solutio, p. 290, ll. 38-40.

18) Algazel, *Metaphysica*, p. 170, ll. 8-13.

19) Cf. *De homine*, q. 39, a. 1, ob. un., p. 293, ll. 26-28.

引用 3

(評定の力とは) 各々の感覚対象のうちに在って感覚されない意味内容を把握するものである。それはたとえば、ヒツジのうちに在って、このオオカミからは逃げるべきである、あるいは、この子ヒツジは慈しむべきであると判断する力などである。この力は、諸々の想像されたものにおいて複合分離もするように思われる²⁰⁾。

それゆえ、アルベルトゥスにおける広義の表象力は、ガザリーの思惟力や評定力に由来するものであると言うよりもむしろ、そのもとにあるアヴィセンナにおける評定力を起源としていると言うべきであると思われる。実際アルベルトゥスも次のように、自身が考える広義の表象力をアヴィセンナに帰しているのである。

引用 4

アルガゼルとアヴィセンナによれば、表象とは、諸々の像の複合分離から引き出された意味内容である²¹⁾。

ただし、アヴィセンナが引用 3 のテキストでしているのは、アルベルトゥスが言うように表象力の話ではなく、あくまでも評定力の話である。それにアヴィセンナは、評定力は意味内容を把握し、像の複合分離もするとは言っているが、アルベルトゥスが言うように、意味内容を引き出すために像の複合分離をするとまでは言っていない。ガザリーに至っては、アルベルトゥスにおける広義の表象力を帰すのは無理であると思われる。その意味で、引用 4 のテキストでなされている主張は、哲学的に見てそのまま肯定できるような内容ではないが、しかし少なくともアルベルトゥスが、自身の考える広義の表象力がアヴィセンナに由来するものであるということに一定の自覚があるということの一つの証拠とはなるであろう。

さて、アルベルトゥスにおける狭義の表象力とは、思弁的真偽に関わる意味内容を像の複合分離によって引き出す能力である。その一方、ふさわしいもの、模倣すべきもの、欲すべきもの、避けるべきもの、嫌悪すべき

20) Avicenna, *De anima*, I, c. 5, ed. Van Riet, p. 89, ll. 49-53; ed. Rahman, p. 45, ll. 7-11. Cf. *Ibid.*, ed. Van Riet, IV, c. 1, p. 6, l. 79-p. 7, l. 88.

21) *De homine*, q. 38, a. 1, ad12, p. 290, ll. 2-4.

もの、有害なものなど、実践的善悪に関わる意味内容を像の複合分離によって引き出す能力は、狭義の表象力とは別に評定力と呼ばれる²²⁾。このような区別は、ガザーリーにはもちろんのこと、アヴィセンナにも見当たらないように思われる。それどころか、これは本稿の3で詳しく述べるが、実践的善悪に係わる意味内容以外に、思弁的真偽に係わる意味内容を考えるということ自体が、恐らくアルベルトゥスに非常に独自なものであろう。

アルベルトゥスは、『人間論』の十数年後に『靈魂論』を書き、ここでも表象力と評定力を定義している。だがここでの定義はむしろ、上述のガザーリーの定義に忠実なものとなっているように思われる。

引用 5

この後、表象力について規定して我々は、表象力とは像を意味内容に、意味内容を像に、像を像に、意味内容を意味内容に複合する能力のことであると言う²³⁾。

引用 6

この能力（評定力）は意味内容を引き出す。（中略）というのも、この者はディオンの息子であると認識することは、息子というものの知を、その者において息子ということが在るのに即して有しているのだから、その者において息子ということが在るのに即して有しているのだから、オオカミが自らの子供を憐れむということも、この個体についての認識と、この個体は自分の息子であるという認識がなければ決してないのである。だから、これらのような意味内容を引き出す何らかの魂の力がなければならぬ²⁴⁾。

このようにアルベルトゥスは、『靈魂論』においては表象力を、様々な感覚像や意味内容を複合分離する能力に留め、その一方で評定力を、様々な意味内容を把握するだけの能力に留めているように見える。この意味で『靈魂論』における表象力、評定力の定義は、上述のガザーリーにおける思惟力と評定力の定義に非常に近づいていると言うことができるのである。なぜアルベルトゥスはこのように、『靈魂論』における表象力、評定力の

22) *Ibid.*, q. 39, a. 1, solutio et ad1, p. 294, ll. 8-20; a. 2, solutio, p. 295, ll. 24-28.

23) *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 3, p. 168, ll. 27-31.

24) *Ibid.*, c. 2, p. 167, ll. 39-48.

定義の仕方を、『人間論』のときの定義の仕方と変えたのであろうか。これは恐らく次のような事情によるであろう。すなわち『人間論』は、アルベルトゥスがパリ大学時代に神学修士として行った討論を基に討論集・問題集形式で書いた『被造物大全（通称パリ大全）』の一部であり、アルベルトゥスの独自性を出すことが比較的しやすい著作であったのに対し、『靈魂論』は、彼がドミニコ会のドイツ管区長時代に、同僚であるドミニコ会士たちの哲学教育のために書かれたアリストテレス註解の一部であるということによるであろう²⁵⁾。だからアルベルトゥスは、表象力，評定力の定義においても、『靈魂論』では、ガザーリーによる当時のスタンダードな定義の仕方に忠実だったのだと推測される。

しかしだからと言って、『人間論』に見られた、表象力の定義に関わる上述のアルベルトゥスの独自性が、『靈魂論』になってまったく消えてしまったというわけではない。たとえば、彼が『人間論』で広義の表象力を定義する際に用いた、像を複合分離して意味内容を「引き出す」という彼独特の表現²⁶⁾も引用6のテキストの冒頭に残っている。そして何より、彼が同じく『人間論』で特に狭義の表象力を定義する際に述べた、思弁的真偽に係わる意味内容という、彼にきわめて独自なものと思われるものも、同じく引用6のテキストの中で、「息子というものの知」「息子であるという認識」²⁷⁾という形で残っていると思われるのである。だから、表象力，評定力の定義の仕方に関する『人間論』から『靈魂論』への変化は、必ずしもアルベルトゥスの思想そのものの変化に帰されるべきものではなく、むしろ両著作の著作としての特性の違いに帰されるべきことであるように思われる。以上で、アルベルトゥスにおける表象力，評定力が、ガザーリーから直接、間接に大きな影響を受けつつも、基本的には、そのもとなっていると考えられるアヴィセンナにおける評定力に由来するものであるということが明らかにされたと言ってよいだろう²⁸⁾。

25) Cf. *Physica*, I, tract. 1, c. 1, p. 1, ll. 9-22.

26) Cf. Hasse, p. 149.

27) これらの表現は、アリストテレスが付帯的感覚対象の例として挙げている「ディアレスの息子」を思い出させる。Cf. Aristoteles, *De anima*, II, c. 6, 418a20-24.

28) アヴィセンナ自身の評定力概念の起源に関する現代の議論については Hasse, p. 127, p. 140, 註 338 参照。

3 アルベルトゥスとアヴィセンナの相異

2では、アルベルトゥスにおける表象力、評定力が基本的にはアヴィセンナにおける評定力に由来するものであることを確認した。ここではこの両者の相異について検討してみることにしたい。両者の相異は、細かな言い回しの相異から内容的な相異まで様々であるが、中でも一番目に付くのは、本稿2でも述べた通り、アルベルトゥスでは、引用6に出てくる「息子である」などのような思弁的真偽に係わる意味内容について語られるが、アヴィセンナにはそれが見当たらないということである。評定力が把握する意味内容の例としてアヴィセンナが挙げるのは、以下のような実践的善悪に係わる意味内容ばかりである²⁹⁾。

引用7

しかし（意味内容とは）その自然本性からして感覚対象ではないものであって、それはたとえばヒツジがオオカミの形から把握する敵意、悪意、自ずから遠ざけられるもの、ヒツジをオオカミから逃げさせる意味内容一般や、ヒツジがその仲間について把握する調和、それによって仲間とともに喜ぶところの意味内容一般などである³⁰⁾。

引用8

そしてこれらの警戒・用心によって評定力は、有害なもの、あるいは有益なものについて、諸々の感覚対象に混ぜられた諸々の意味内容を把握する³¹⁾。

では、このような両者の相異に一体どんな意味があるのであろうか。ア

29) ブラックによれば、アヴィセンナは、実践的善悪に係わる文脈以外の様々な文脈において、実に様々な機能を評定力に帰している。しかし、そこにおいても、実践的善悪に係わる意味内容以外の意味内容、たとえばアルベルトゥスが考えるような思弁的真偽に係わる意味内容を評定力が把握するというようなことは、全く考えられていないようである。Cf. Deborah L. Black, "Estimation (*Wahm*) in Avicenna: The Logical and Psychological Dimension," *Dialogue*, 32 (1993), pp. 219-258.

30) Avicenna, *De anima*, IV, c. 1, ed. Van Riet, p. 7, ll. 82-86; ed. Rahman, p. 166, ll. 7-10. Cf. Hasse, p. 131.

31) Avicenna, *De anima*, IV, c. 3, ed. Van Riet, p. 38, ll. 33-34; ed. Rahman, p. 184, l. 8-9. Cf. Hasse, p. 131; Avicenna, *De anima*, II, c. 2, ed. Van Riet, p. 118, ll. 7-12; ed. Rahman, p. 60, l. 13; Hasse, p. 130 et 149.

ルベルトゥスは、『人間論』と『靈魂論』の間の時期に彼が書いたと考えられている『自然学』第1巻第1論考第6章において次のように論じている。すなわち、感覚は評定力によって、まず最高類の自然本性を認識し、その次に類、その次に種と順々に認識していき、最終的には個の判明な認識へと至る。ここまでのプロセスは自然学に固有なプロセスである。次にこの個の判明な認識から今度は知性が種、類、最高類へと分析を行っていく。このプロセスは他の学知にも共通するプロセスである³²⁾。つまりアルベルトゥスは、評定力に基づいてなされる感覚認識を自然学の基礎、ひいては他のすべての学知の基礎に据えていると思われるのである。ところでこのアルベルトゥスの議論は主として以下の三つの理由から、自然学について論じているアヴィセンナの『治癒の書』第2部（通称 *Sufficientia*）第1巻第1論考第1章の議論に由来するものであると思われる。第一の理由は何と言っても内容的な類似性である。

引用 9

感覚、想像力は、それらが諸々の個を把握するのに、まず、共通的理解内容とより多く類似している個的想像から始まり、あらゆる部分からして純粋な個である個的想像にまで至る³³⁾。

引用 10

共通的なものにより類似しており、類似性により近付いているものがより知られたものである。というのも、「これは或る動物である」ということは、先に、或る物体であるということ把捉していなければ、感覚と想像力によって把捉され得ないし、これは或る人間であるということも、或る動物であるということと、或る物体であるということが先に把捉されなければ把捉されないのである。その一方で、遠くから見た時、或る物体であるということは把捉するが、或る人間であるということは把捉しないということが時々あるのである³⁴⁾。

32) *Phys.*, lib. 1, tract. 1, c. 6, p. 11, l. 93-p. 12, l. 63. 拙論「アルベルトゥス・マグヌスにおける表象力について」、『中世思想研究』第49号, pp. 87-98 参照。

33) Avicenna, *Liber primum naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 11, ll. 0-3; *Al-Shifā*, *Al-Ṭabī'yyāt*, I, ed. Said Zayed, Cairo, 1983, p. 9, ll. 17-19.

34) Avicenna, *Liber primum naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 11, ll. 12-17; *Al-Shifā*, *Al-Ṭabī'yyāt*, I, p. 10, ll. 3-6. Cf. Avicenna, *Liber primum naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 16, ll. 97-00. ここで「共通的なものに」と訳した *communi* のところには、アラビア語原文では

つまりアヴィセンナによれば、感覚と想像力は、共通的な知解内容により多く類似している個的な想像内容から順に把捉していく。たとえばまず「或る物体である」ということを把捉し、その次に「或る動物である」ということ、そしてさらに「或る人間である」ということを把捉する。このようにして最終的に感覚、想像力は純粋な個（まさにこのこれ）の想像へと至るのである。

引用 11

というのも、諸々の個は内的感覚力において描かれ、そしてその後、諸々の個から知性は共通性と相異性とを抽象して、種的に共通的なものの自然本性を抽象するのである³⁵⁾。

アヴィセンナによれば、上述のように感覚において把捉された純粋な個の認識から今度は知性が抽象を行って、再び種の把捉へと至るのである。そして第二に、以上のようなアルベルトゥスとアヴィセンナの二つの議論の類似性は、アルベルトゥス『自然学』のケルン版校訂者も指摘している。『自然学』第1巻第1論考第6章の中で校訂者は三回にわたって『治癒の書』第2部第1巻第1論考第1章を参照するよう指示している³⁶⁾。特にアルベルトゥスが上述の議論の中で、「このことをアヴィセンナは、我々が遠くから見る人によって素晴らしく証明している」³⁷⁾と述べているが、この箇所はケルン版校訂者が指摘する通り、明らかに引用 10 の最後の一文を指しているように思われるのである。両議論が密接に関係していると言える第三の理由は、両議論のテキストとしての位置にある。すなわち、アルベルトゥスの上述の議論は、アリストテレス『自然学』第1巻第1章を註解した後で出て来る付論（digressio）の部分に当たるものであり、その註解に深く関わる議論である。一方アヴィセンナの上述の議論も、自身の自然学に関する著作の第一章目であり、そのラテン語訳の題名「自然学にその原理を通して至る道を指定することについての章」³⁸⁾が示している通

ilm（知識、学問）という言葉が使われている。

35) *Ibid.*, p. 10, ll. 88-90; *Al-Shifā', Al-Ṭabī'iyāt*, I, p. 9, ll. 12-13.

36) *Phys.*, lib. 1, tract. 1, c. 6, p. 11, ll. 73-74, p. 12, ll. 7-8, 19.

37) *Ibid.*, p. 12, l. 19.

38) "capitulum de assignanda via qua pervenitur ad scientiam naturalium per principia eorum"

り、内容的に見て明らかにアリストテレス『自然学』第1巻第1章の議論を意識した議論であると思われるのである。

さて、アルベルトゥスの上述の議論では、非常に重要なところで評定力が登場する。まずアルベルトゥスは上述の議論の冒頭で、「理性が何がしか混じっている感覚の知覚、すなわち評定力の知覚である認識は、付帯的感覚対象を受容するものであり、この認識は、個体に広がる共通的自然本性について生じる。」³⁹⁾と述べている。ここで語られている「すなわち」を「または」「あるいは」などと訳して、「理性が何がしか混じっている感覚の知覚」を、人間の知性に動かされながら、すでに把握されている諸々の感覚像を複合分離する想像力や表象力による何らかの感覚認識と解釈するのは、可能なようにも見えるが、実際は困難である。というのも、この知覚は「対象を受容するもの accipiens」と言われており、それは「把握するもの apprehendens」という意味であろうが、複合分離する能力であるかぎりの想像力も表象力も「把握するもの」とは言われ得ないであろう(引用2参照)。それに、感覚能力であるこれらの能力が知性の有する普遍概念を把握することはそもそも不可能だろうからである。そしてこの言葉の後、感覚が最高類の自然本性から順に類、種、個と認識していくと主張されるが、それは文脈的に見て明らかに評定力に基づいてのことなのである。さらにアルベルトゥスは、上述の議論が始まる直前の段落で、我々人間の感覚による受容を三つに区別している。すなわち、個別感覚だけによる受容、共通的で同時に個別的な感覚による受容、そして、個別感覚、共通感覚、評定力による受容⁴⁰⁾の三つである。ここでアルベルトゥスは評定力について次のように比較的詳細に解説し、それを前提にして上述の議論を開始している。

引用 12

諸感覚に混ぜられた理性や、非理性的なもの(非理性的諸動物)の評定力による受容は、事物の自然本性に関わっている。事物には諸々の

39) cognitio, quae est perceptio sensus cum permixtione aliqua rationis vel aestimationis, est accipiens sensibile per accidens, et casus eius est supra naturam communem in supposito diffusam; *Ibid.*, p. 11, l. 93-p. 12, l. 3.

40) *Ibid.*, ll. 55-59. 正確には「固有感覚と共通感覚と、感覚に混ぜられた理性による、すなわち、理性の位置に在り、或る人々が評定力と呼ぶ、感覚的魂の部分である認識による何らかの認識に即した受容」

付帯性があるが、これらは固有感覚によって感覚されるものである。そして固有感覚対象の基にある事物の大いさは共通感覚によって受容される。少年が、父は人間の男であってロバではないと受容するの、子ヒツジが、母はヒツジであってオオカミではないと受容するの、かのもの（諸感覚に混ぜられた理性や、非理性的なものの評定力による受容）を通してなのである⁴¹⁾。

ここでは「諸々の非理性的なもの（非理性的動物）の評定力」という言い方がされているが、だからといって人間における評定力が否定されているわけではない。実際、引用 12 が含まれている段落の冒頭では、「感覚による我々の受容は三通りある」（下線筆者）と語り始められている⁴²⁾。そして何より、アルベルトゥスは自身の『靈魂論』⁴³⁾ではっきりと、非理性的動物と同様に人間にも備わっている評定力について語っているのである。恐らくここで語られている「諸感覚に混ぜられた理性」自体が、「理性が何がしか混じっている感覚」と同様、評定力を指しており、ここでは特に人間における評定力を指しているのであろう。実際ここで例として挙げられているものはまぎれもなく、評定力が語られるときのおなじみの例なのである。これに対して、アヴィセンナの上述の議論では状況が異なる。確かにアヴィセンナの上述の議論では、アヴィセンナにおいて評定力が把握するものに用いられる *ma'nan* というアラビア語に当たる語（感覚論の文脈では一般に *intentio* と訳されるが、ここではあえて *intellectus* と訳されている⁴⁴⁾）が何回か登場する。しかし、アヴィセンナにおいて評定力そのものを示すアラビア語である *wahm*（一般に *aestimatio*, *aestimativa* と訳される）に当たる語は一回も出てこないのである。

なぜこのような両者の差が生じたのであろうか。それは恐らく、本稿 3 の冒頭で述べたことによるのであろう。すなわち、アルベルトゥスは、評定力が把握するものとして、「息子である」「人間である」「ロバである」「ヒツジである」などのような思弁的真偽に係わる意味内容について語る。

41) *Ibid.*, ll. 65-71.

42) *Ibid.*, ll. 51-52.

43) *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 2, p. 168, ll. 1-24.

44) Avicenna, *Liber primus naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 11, l. 2 et 4; p. 12, l. 32. 訳者がここで敢えて *intentio* ではなく *intellectus* と訳しているのは、ここでの意味内容が感覚によって把握されるものではなく、知性によって把握されるものを指していると考えたからであろう。そしてその解釈は、文脈からして正しいように思われる。

それに対してアヴィセンナは、評定力が把握するものとしては、実践的善悪に係わる意味内容にしか言及しない。その一方で、アヴィセンナの上述の議論において感覚が把握するとされているのは、物体性、生物性、動物性、人間性など、個々の事物に共通する自然本性という思弁の意味内容なのである。それゆえ、アヴィセンナのように、評定力が把握する意味内容にこのような内容を含めて考えていない場合、上述の議論の中で評定力を持ち出すことは難しいであろう。逆にアルベルトゥスのように、評定力が把握する意味内容に、個々の事物に共通する自然本性という思弁の意味内容を含めて考えている場合には、上述の議論の中で評定力の話を持ち出すことに何ら問題はないのである。以上のように、アルベルトゥスが、表象力ないしは評定力が把握するものとして、思弁の真偽に係わる意味内容を含めて考えていたために、そのような表象力、評定力に基づく感覚認識を自然学の基礎に据えることが可能であった。それに対してアヴィセンナは、そのような意味内容を評定力が把握するものとして考えていなかったため、評定力と自然学とを結びつけることがなかったのである。

4 アルベルトゥスの独自性の核心

本稿3では、アルベルトゥスが、アヴィセンナとは異なり、表象力や評定力が思弁の真偽に係わる意味内容をも把握すると考えたため、これらの能力を自然学の基礎に据えることができたのを見た。ここでは、アルベルトゥスとアヴィセンナの相異についてもう少し詳しく見てみることにしたい。アヴィセンナは引用10の議論、すなわち『治癒の書』第2部第1巻第1論考第1章の議論において、感覚はどのようにして物体性や動物性や人間性を認識できると考えていたのであろうか。引用10を見る限り、この疑問を解く手掛かりとなりそうなのは、最後の一文にあるような、何かを遠くから見る場合の説明くらいしか見当たらないように思われる⁴⁵⁾。確かに、何かを非常に遠くから見るような場合、人間であるとか、動物であるとかいうことが全く分からないとしても、目に見えているかぎりそれは物体であり、それゆえ、物体であるという感覚認識は確実だと言ってもいいかもしれない。しかし、これと同じ仕方で、何かが動物であるということを確認に認識することは難しいだろう。なぜなら、たとえそれが動いて

45) Avicenna, *Liber primus naturalium*, tract. I, c. 1, p. 11, l. 17; p. 12, l. 34; *Al-Shifāʾ, Al-Ṭabīʿiyyāt*, I, p. 10, l. 6 et l. 14.

いるということが確実に分かったとしても、それだけで、それを動物だと断定することはできないからである。もしかしたら非生物がただ他の何かに動かされているだけかもしれないからである。

もう少し視野をこの議論全体に広げてみよう。アヴィセンナは人間知性による物体性や動物性や人間性の認識について同じ箇所ですべてのように述べている。

引用 13

そしてすべての人間は、共通的で類的なものの自然本性の認識においてほぼ一致している。しかし人々が異なっているのは、人間の中の或る人々は種的なものを知って種的なものへと至り、区別を吟味するが、他の人々は類的なものを知にとどまるからである。実際、或る人々は動物性を知っているが、他の人々は人間性やラバ性を知っているのである⁴⁶⁾。

この引用 13 の箇所の後、感覚の話が始まる箇所⁴⁷⁾より後のテキストの中でアヴィセンナは、乳幼児でさえ何らかの物体を人間の男性、人間の女性と感覚認識できると語っていると読めるので⁴⁸⁾、引用 13 で語られていること、すなわち、物体性や動物性などの類的な認識において人間はほぼ確実に認識できるが、人間性やラバ性などの種の認識においては人によって異なるという話は、感覚認識とは異なる次元の話、つまり知性認識の話であると解釈すべきであるということが分かる。それでは、引用 13 で語られているような、人間の知性認識の差異は一体どこから来るのであろうか。引用 11 で語られたような知性の抽象作用の差異から来るのであろうか。それともその逆に、人間の知性認識の差異が、引用 9, 10 で語られたような感覚認識の差異を生むのであろうか。それは少なくともアヴィセンナのこの議論においては明らかではないように思われる。ところで、今、上で述べた乳幼児の感覚認識の話は、アヴィセンナの評定力理解に即して強

46) Avicenna, *Liber primus naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 9, ll. 71-75; *Al-Shifā', Al-Ṭabī'īyyāt*, I, p. 9, ll. 3-5.

47) Avicenna, *Liber primus naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 10, l. 84; *Al-Shifā', Al-Ṭabī'īyyāt*, I, p. 9, l. 9.

48) Avicenna, *Liber primus naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 12, ll. 21-30; *Al-Shifā', Al-Ṭabī'īyyāt*, I, p. 10, ll. 8-12.

いて解釈するならば、乳幼児が大人に庇護を求めることができるための実践的善悪判断の一部であるということになるだろう。このような感覚認識と、引用 11 で語られているような知性の抽象作用との関係もまた、アヴィセンナにおいては判然とは語られていないように思われる⁴⁹⁾。それに対してアルベルトゥスは、アヴィセンナにおける評定力を明らかな仕方では拡張解釈することによって、感覚認識を自然学の学としての基礎となり得るものと理解したのである。

5 結 語

アルベルトゥスにおける表象力, 評定力は, 基本的にはアヴィセンナにおける評定力, すなわち, 実践的善悪に係わる意味内容を把握し, それに関して複合分離をする能力に由来するものであると思われる。しかしアルベルトゥスは, アヴィセンナとは異なり, 表象力ないしは評定力が把握するものに, 実践的善悪に係わる意味内容だけでなく, 思弁的真偽に係わる意味内容をも含めて考えた。その結果, 表象力, 評定力に基づく感覚認識を自然学の基礎に据えることが可能となった。ここに, アヴィセンナに対するアルベルトゥスの独自性があると思われる。

49) アヴィセンナにおける知性認識で感覚認識がどれほど積極的な役割を果たしているのかという問題については, 現代のアヴィセンナ研究者の間でも相当に見解が分かれているようである。Cf. Hasse, pp. 183-186.